異説SF超次元伝説ラル

ラモー・ルー城の回廊を三つの人影がユラユラと移動していく。

壁に掲げられた燭台の弱々しい光では黒いローブを着た二人の影はその主との境の見分けがつかなかったが、もう一人の純白のローブを着た者を浮かび上がらせるには十分だった。

3つの影は回廊の突き当たりで立ち止まる。そこには重厚な扉があり、黒いローブの一人がかけられた錠前をガチャリと外し、扉を開ける。ギギギイイイ……、重苦しい音を回廊に響かせ、まるで魔物が口を開けるように扉が開く。

黒いローブの者が恭しく白いローブの者を扉の奥へと案内した。

「ここで御召物をお脱ぎください」

黒いローブを着た従者に促され、白き者は頷く。

すると衣きぬず擦れの音を残しながら白いローブが床にすべり落ちると、そこには一糸いつし纏まとわぬ姿のキャロンが立っていた。身に付けている物といえば、長い金髪をポニーテールに纏まと

めている金色の髪留めだけ。

「こちらへ」

「……はら」

キャロンは二人の従者の後に続く。

これまで幾度となく衆人環視の前でラモー・ルーによる淫術を施されてきたキャロンにとって、最早その瑞々^{みずみず}しい裸体を従者達の前に晒しても恥じらう事なく、——彼女に流れるラル王家の血がそうさせるのか——むしろその振る舞いには気品があった。

部屋のさらに奥へと続く短い通路を抜けると、そこは何本もの石柱が天井を支え、大きな石造りの浴槽が据えられた大浴場であった。キャロンが昔見た事のある、ラルの城下街にあった公衆浴場に似た造りだったが、大きく違うのは浴槽には温水ではない何やらドロツとした白い半透明の液体が溜められ、それが放つ生臭い臭いが浴場を満たしていた。

「……っ」

（この鼻を突くような嫌な臭い、だけど記憶にある臭い、私の体をとろけさせてくれる物の臭い……）

「お気づきになりましたか？ここを満たしているのはラモー・ルー様の精液を培養した物、すなわち聖なる液……」

従者が説明をするが、キャロンは半ば上の空。

「……はあ……ああ」

浴室に充滿する臭いと、生ぬるい湿気がねっとり肌に張り付いてくる感触。それが自分の体のあらゆる場所をしゃぶり尽くしたラモー・ルーのあの舌を思い出させ、臍へその下あたりを中心に体が徐々に火照ってくるのをキャロンは感じていた。

「ラモー・ルー様との契の儀式に臨のぞむに当たって、キャロン様にはここで御身おんみを清めて頂きます」

従者が手を浴槽の方に広げ、キャロンに入浴を促した。

「さあキャロン様、浴場の中央までお進みください」

「……は」

キャロンは引き寄せられるように浴槽に向かい脚を浸ける……

「きゃっ……」

生暖かい白濁液がまるで意志を持つてるかのようにねっとり絡みついてくる気持ち悪い感触が踏み出した脚を引っ込めさせた。それは生き物としての防衛本能だった。

しかし、浴槽の液体の発するラモー・ルーと同じ臭いが媚香びこうのように働き、これから始まるであろう淫靡いんぴな宴への期待を膨らませ、キャロンに歩を進めさせる。

静かに浴場の中央に立つキャロンの周りの水面がユラユラと揺らめいたかと思うと、液体の中から触手が現れ、彼女の太ももをゾゾッと這い上がった。

「うやあ……ん……」

抵抗の言葉とは裏腹に、キャロンは魔物の為すがままにさせていた。

触手は浴槽の液体をキャロンの肌に塗り込むようにヌルヌルと這いずり回ると同時に舌で嘗め回すような動作で彼女の敏感な部分を責め立てる。

「あ……あああん……はあ……はあ……」

キャロンの体に淫欲の火が付くにはさほどの時間はかからなかった。薔薇色の唇から甘い吐息が漏れ始める。

「つく、ああああん……だめ……え……」

触手の淫らなマッサージに身を任せ、粘液を塗りたくられるキャロンの体は浴場の薄暗い灯りに照らされ、ぬらぬらと輝いていた。

獲物を齧っていた触手がぜんまいが切れるように動きを止めた。

「……ああん……」

キャロンの悦びに蕩けていた表情が「もうお終い？」とばかりに不満のものへと変わる。が、すぐに触手は大きく波打つように動き始め、キャロンの手首足首を掴むようにきつく絡みつくと彼女の体を宙に持ち上げる。

「ああん！……あああ……はあ……はあはあ、ああ……、ああ！……」

触手が再び動きを止めるとその形は異形の玉座……、キャロンはそこに×字の姿勢ではりつけにされていた……いや、それははりつけたい 磔台となっていた。

愛撫を中断され、生殺し状態のキャロンははりつけたい 磔台の上で刺激を求めもぞもぞと体を動かす。

「次は……な……に……い……?……ああん……」

キャロンの催促するような声に反応したのだろうか、はりつけたい 磔台となった触手の根元から枝分かれするように別の触手が生えてくる。それはペニスの形をしていた。

「……あああああん」

快楽を与えてくれる新たな来訪者を期待の目で見つめるキャロン。

ペニス触手はツンツンとキャロンの体をつつきながら彼女の口元まで這い上がるとゆっくりと唇をこじ開け、口腔を犯し始めた。

「うううっ！……あふ、んんん、っはっんん……」

キャロンはそれに応えるようにペニス触手に舌を絡みつかせ愛撫を始める。それが愛おしい者の一物であるかのように入念に……。

「…ふぐ…んんっ…んんっ、…あああん…」

恍惚の表情を浮かべ口淫に耽るキャロンは、大きく脚を開かれた彼女の股下から新たなペニス触手が生え出してきた事に気付いていなかった。

無防備なキャロンの秘裂に二本目のペニス触手はその鎌首を擦りつける。

「んんっ…あああああん！」

不意の攻撃にキャロンの嬌声が鈴のように響く。

二つ目がその亀頭でキャロンの秘裂をクチュクチュと嫌らしい音を立てながら何度か撫で上げると、そこには粘液で淫靡な輝きを放つ花卉が開き、露わにされた蜜壺がヒクつきながら蜜を滴らせていた。

「いやああ、…あああああん…きてえ…ああ……」

キャロンは亀頭を自らの入口へあてがおうと腰を動かすが、ウネウネと触手ペニスは焦らすように動き回り、うまくいかない。

鬼ごっこをしているうちに、ふっとキャロンの視界から触手が消える。

「……え……なに？どこへ……いつちやった……の？」

キヨロキヨロと視線を彷徨さまよわせるキャロンの死角から忍び寄った触手ペニスが彼女の蜜みつ壺つぼを一気に貫くとそのまま亀頭を子宮口に叩きつけた。

「ひっ、あっ！……あああああっ！ あああああん！！」

子宮を貫かんばかりの衝撃にキャロンは悲鳴とも悦びの声ともつかない声をあげる。

少女のまだ幼い膣を占拠した触手ペニスは居心地を確かめるように最初はゆっくりと、そして徐々に動きを速めていく。

「はああん……あっあっ！……ああああん！」

力強いピストン運動でキャロンの体は跳ね上げられ、そして重力によって落ちてくる所を触手ペニスが再び突き上げる。

「ああっ！……あああっああっああん！」

手足を縛くわめられ体の自由を奪われたキャロンはこの人外の拷問から逃げることは出来ない……

「ああっ……もっ、と……ああっ、くっんん、ああああっ！」

いや、キャロンはこの淫術を楽しんでいた。より深く貫かれるように、触手ペニスの動きに合わせて腰を動かしていた。ポルチオをコンコンとノックされる衝撃がウテルスを振るわせ、その波動が下腹部から脳天まで貫く。キャロンは蕩よけるような快楽を得ていた。

「あん…うああっ、ああああん！ あああん！ああああああ！」

子宮に打ち付けられる淫欲の波動に意識が集中してフェラチオが疎かになつてるキャロンを戒めるように口を犯していた。ペニス触手はキャロンの喉深くをその亀頭で打ち据える。

「っぐ！ ごほっ…ごほっ…むうんん…んんっ」

「触手ペニスへの奉仕を再開するキャロン。」

「うん…はあ…ううむう、ふっ、…ああああっ」

激しく往復するペニス触手に絡みついたキャロンの花卉からは潤滑油のようにとろとろと愛液が溢れ出し、辺りに牝の臭いを漂わせる。

その臭いに誘われるように、また1本、また1本と生えてくるペニス触手。それらはキャロンの小振りな乳房に巻き付いたり、乳首を締め上げたり、クリトリスをこすりあげたり、首筋を這いずり回ったり——ラモー・ルーによって開拓された彼女の性感帯をくまなく蹂躪する。

にちやり、にちやりと淫蛇の群れがキャロンの体にまとわりつき蠢く音とキャロンの喘ぎ声のシンフォニーにもファイナーレの時が訪れようとしていた。

「もう…ダメ…:…:…:ああああん、ああああん！ ああああ…:…:ちやううう！」
キャラロンが絶頂を迎えようとするその時、ペニス触手達もビクツ、ビクツと大きく脈動を始め…:、

「んんっ！ ああああああああっ！」

キャラロンがイクのと同時に一斉に射精を始める。

ビュツ、ビュルルル、ビュルルルツ！

激流となって喉に流し込まれる白濁液を一滴も漏らさず飲み込もうとするが、ついに耐えきれず息継ぎをするキャラロン。

「んんんっ、くっ、ふぐっ・・・うううう、あああああああっ！」

吐き出されたペニス触手は構わず彼女の顔に精液を放出し続ける。

「はあああああああっ…:…:ん…:…:」

キャラロンの小さな蜜壺みつづぼも暴力的な射精を受け止められず、逆流した精液が結合部から溢れ出し、ぱたぱたと雨のように滴り落ちる。

「…:…:はあ…:…:ああああ…:…:はあ…:…:ん…:…:」

オーガズムにぴくんぴくんと痙攣けいれんするキャラロンの体に、彼女の体を弄もてあそんでいた触手ペニス達がシャワーのように精液を浴びせる。

「……はあ……はあ……あ……」

はりつけだ
磔台の上のキャロンの体は白く薄いベールを纏まとっているように見えた。

浴槽から上がったキャロンの前に従者達が跪ひざまずく。

「キャロン様のお体の内も外も聖液で清められました。これより臨まれる契りの儀式にてラモー・ルー様をつつがなく受け入れることが出来る事でしょう」

従者の一人が小さな壺を恭しく捧げる。

「儀式の最後にこれを。……ラモー・ルー様から賜った精液でございます」

「……」

器を受け取ったキャロンは、こく、こく…、ラモー・ルーの種たねを飲み干す。そして、唇からこぼれ、あごへと滴った精液を指で拭い、それを舐める。

「……はあ、ん……」

先刻イッたばかりだというのに、乳首が再び尖り、子宮のあたりがきゅんきゅんと疼き始める感じに思わず甘い声を出してしまうキャロンだった。

「これで禊みそぎは終わりました。キャロン様」

「では魔王の間へと参りましょう、ラモー・ルー様がお待ちかねです」

11 異説SF超次元伝説ラル

「は……」

「襖みそぎ
「おわり